



TITLE:

カアライルのラタデ・パムフレッツ (社会評論家としてのカアライルの五)

AUTHOR(S):

石田, 憲次

CITATION:

石田, 憲次. カアライルのラタデ・パムフレッツ(社会評論家としてのカアライルの五). 経済論叢 1919, 8(1): 141-146

ISSUE DATE:

1919-01-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127471>

RIGHT:

カアライルのラタデ・バム フレッツ

(社會批評家としてのカアライルの五)

石 田 憲 次

カアライルは前にも述べしが如く、社會國家の事に關して、當時の政治家、政論家と著しく違つた意見を持つて居つた。其れ故佛國革命史を書上げた後、チャアチズムを公にし、クロムエルに取掛る前に「過去と現在」を書き、今復たクロムエルを終へて、ラタデ・バムフレッツに筆を執つたのである。ラタデ・バムフレッツとは八部の小冊子に冠せられたる名であつて、譯せば「現代評論」とでもすべきであらうか。千八百五十年二月に第一冊が公にせられ、同年八月に第八冊が公にせられた。併し此等は前年十二月のフレイザ雜誌に掲載せられた「黒奴問題雜論」¹⁾と

1) Occasional Discourse on the Nigger Question

共に、其の年の夏に書かれたものである。

「黒奴問題雜論」はラタデ・バムフレツツの露拂の役を勤めて居るもの故、此言で一言致し度いと思ふ。

此れより前、英國では多大の金を費して奴隷廢止を實行した。然るにカアライルの意見に依るに其の結果は餘り芳しくないのである。解放せられた黒奴は、西印度の肥沃な土地に幾何でも南瓜の熟するを幸ひ「顔をその耳元まで南瓜の中に埋めて甘い汁を吸ふ許」¹⁾少しも仕事をしやうとせぬ。其の爲め甘蔗は刈る者無くして立腐にせらねばならぬのである。凡そ²⁾如何なる黒人でも、神々が働く爲めにとて與へた彼の能力相應に働かうとせぬ者は、南瓜を喰ふ權利も無く、又如何に土地が多くとも、南瓜を生ずる土地の寸分も所有する權利は無いのである。否な寧ろ其の土地の眞の所有主に依つて、彼の生計の爲め相當の仕事爲すやう強制せらるべき權利を確に且つ永遠に亘つて持つて居るのである。其の眞の所有主とは「神が土地に賦與した

有益なる天産を其れより最も良く産出し得る者、換言すれば、其の土地に於て最も雄々しき生活を營み得る者」此の場合には即ち白人である。白人は一西印度を占領すべきで、懶惰なる二足の畜類が、如何に有り餘る南瓜を喰つて幸福に暮して居るも「彼等に其の土地を委ねて置く譯には行かぬのである。さうして黒人を統治し、指導し、已むを得ずば強制するが白人の任務であつて、自由放任、需要供給と云ふが如き原則に頼つて、彼等との關係を斷つは却つて慈悲では無い。現代の職業には永續と云ふ事が缺けて、奴婢の如きも一時的の契約に依るのであるが、黒人は白人の終身の奴婢即ち奴隷たるに丁度適當の人種ではあるまいか。尤も其の中獨立の能力ありと認められたる者、即ち一定の貯金を爲し得たる者には自由を與ふるも妙策であらう。——大體かう言ふのが、カアライルの考であつて、彼は此の論の發表に依つて、人道主義的見地から爲された奴隷廢止に對して同情少きが如き感を與へ、又彼の極端なる言葉遣は人間

1) Complete Works of Thomas Carlyle New York. Collier & Son, Critical and Miscellaneous Essays, Vol. IV, p. 295

2) Ibid., p. 299.

3) Ibid., p. 317.

4) Ibid., p. 317.

生得の價値を蔑視するやうな、暴力を讚美するやうな、傾向をさへ示して、ミルの如き神經の纖細敏感な人には多大の苦痛を與へ、二人の乖離は到底救ふべからざるものと成つた。ラタデ・

バムフレッツに於てもカアライルの此の毒語癖は著しく、當時既に世人の憤懣を買ひ、今日でも批評家が、著者の爲めに惜むのである。オーガステン・ビレルと云ふ批評家は、カアライルの此の傾向の原因を彼が「地上に於ける人間の究極の運命に信仰を失つた」事に歸して居る。私はフルウドと共にカアライルの人類に對する深い愛情の泉が年を経ていや深く成り増つた事を信ずるものであるが、少くとも晩年のカアライルに於ては此の泉が厚い氷に鎖ぢ込められた傾がありはせぬかと思ふのである。次に掲ぐる當時の日記は自らラタデ・バムフレッツ、「黒奴問題雜論」等の缺點を説明して居ると思ふ。

「²⁾ 俺は今此の世界で如何にも淋しい人間に成つた者だ。又硬く成つた者だ。俺は頻々石でども出來て居る氣がする。昔の類へるやうな愛情はすっかり其儘俺の裡に在る。併しそれ

は氷結したやうなのだ。其れは嘲られ、鞭たれ、反對に依つて、狂はしくせられて、いはよ一種鐵の如き眠に落ちてしまつたのである。

ラタデ・バムフレッツの第一は「現^{ザンセンデナム}代」

と題する論文である。羅馬法王廳に新約聖書に準據して改革を實行しやうと計る新しき法王が選ばれてより、改革の火の手はシ、リの島民に傳はり、其れは更に佛國に飛火して二月革命と成り、所謂民主々義の運動は全歐の地に瀰漫した。故習舊慣は悉く一掃し去られた觀がある。併しながら此れは唯³⁾ 虚偽の一般的破産「(Universal Bankruptcy of Imposture) に過ぎないので、破壊は終つても建設の方面には一步も進めて居らぬのである。現代の自由を謳歌する者は、道路に倒れかゝつた家の中で風通しがよく、月日が宜く拜めると言つて喜んで居るやうなものである。民主々義、一般選舉、無記名投票は決して一國を統治する道では無なく、宇宙の法を知れる賢者を擧げて國政を司らしめ、不賢者に其の命に從ふより外には無い」⁴⁾ 諸君の船はいくら巧な

1) Augustine Birrel, Obitier Dicta, Carlyle, p. 21

2) J. A. Froude, Carlyle's Life in London, Vol. II, p. 23

3) Complete Works of Thomas Carlyle, Latter-Day Pamphlets, p. 269

4) Ibid., p. 274-5.

投票法に依ても、ホーン岬を廻る事は出来ぬ。船員が甲板の上下で、いくら調和の宜い、申分無い立憲的な方法で彼此投票したとしても其の船がホーン岬を廻らむ爲めには、太古以來天地鬼神に依つて票決せられ、金剛不壊の確さを以て定められた條件があつて、彼等は諸君が如何に投票しやうとも構はぬのである。此の條件——此の自然の大法を知る人が船長と成らずしては、船は唯覆没破碎の運命を待つ外は無いのである。

第二の「模範監獄」に於て、カアライルは近世の慈善主義に猛烈なる攻撃の矢を向けて居る。我等は現時罪人を罰するに當りて、其れは見せしめの爲めとか、社會を保護する爲めとか言ふが、其れは無意味の閑語であつて、彼を罰するは「彼に關する神の意志命令を行ひ、彼に對して正義を施す」と云ふ以外に理由は無い。¹⁾「我が博愛なる友よ、私は此の惡人に對する神聖なる赫怒、即ち我等が神より直接に得た眞實の警告こそ凡ての刑法の根柢なる事を認めるのである」²⁾「運命の峻嚴の如き悲哀沈黙冷酷なる

峻嚴を基礎とせずしては、如何なる眞の憐憫も可能ならざる事を了解すべきである。其の基礎無くして起り易く且つ豐なる如き憐憫は單なる懶惰卑怯なる女々しさ、頭のぼんやりした事に根柢を有する泣虫の心の弱さであつて、飲んだくれの涙の如く輕蔑すべき者である。」

第三は「ダウニング街」(Downing Street)を題して、英國政府の改革の必要を論じたものである。ダウニングは蓋し英國主要官衙所在の街名である。カアライルの意見に依れば、政府の改革は議會の改革よりも急事であるが、其れが斯かる事情に至つたには二つの恐ろしき誤謬が存在して居たのである。其の一は事務が下手に處理せられた事で、一は處理せらるゝ事務が全然間違つた種類のものであつた事である。人は自己の處理する事務が重大にして而も正當なりと感ずるにあらずんば、愈々益々粗略に其れを處理し易きものである。故に政府の改革者は眼を大局に注いで先づ間違つた種類の事務を情弊に因はれず一掃し得る達誠の士でなければなら

1) Ibid., p. 329.

2) Ibid., p. 333.

3) Ibid., p. 337.

ぬ。達識の士は何處にありても、「¹⁾虚偽と無秩序の天成の敵、眞理と秩序の天成の戦士で、彼を如何程背理なる渦中に置くも、彼は其處に在りて少しなりとも其の背理の度を減じ、其れを復た少しなりとも秩序ある人間的の物たらしめんとて戦ふのである」。而して斯かる達識有能の士を要路に就かしむる一法として、カアライルは國會議員のみが大臣となる當時の制度を倒にして、大臣顯官に任ずる者には議員の席を與ふる事とせむ事を提唱して居る。

第四は「新ダウニング街」と題し、英國政府の改革すべき方面を論じたものである。之に依れば、カアライルが世人の兎もすれば誤解するが如き侵略主義者で無かつた事が宜く了解せられるので、彼は出来るだけ外國と事を構ふるを避け、内治に力を盡して、教育、救貧の事に當るべしと説いて居る。

²⁾「我等は貧民一人存する所、一の罪ありと信じて可なりである否な一人の貧民を作るには、多くの罪が密合つて居るのである。貧窮は我々の社會的の罪が明に成つたもの、換言すれば

精神上の陋劣、實踐上の不當、義務の淺薄敷き忘却から發達して、計は籌上の問題に成つたのである」。

序ながら外國と事を構ふる事を厭ふカアライルも英國の殖民地は重視する方で、英國人の父祖が血を流し骨を晒した、眼に見えぬ無限の價値の含まれて居る土地を金銭上計算に合ふかはぬかのみより考へて手離す事は有るまじき事と言つて居る。

第五、「³⁾太道演說家」は饒辯を呪詛して沈黙を讚美した論である。中世に於ては立身出世の道が凡て實地の見習に依つて開かれたに、現代のそれは凡て二寸の舌頭に懸つて居るやうである。³⁾斯く迄辯口に感服して居る時代は、無言の仕事や凡て深密眞實な事には眼の開いて居やう筈が無い。如何に誠實な言語でも事實と相距る事既に一步であるが、黙辯を弄する者は、不知不識事實に遠かる習慣を養ひ、遂には其の思想すら事實と絶縁したものと成るのである。故にカアライルは聲を鋭くして青年を戒めて居る。

⁴⁾「汝英國の青年よ、將來何等かの人物に成らむとしつゝある者

1) Ibid., p. 358.

2) Ibid., p. 405.

3) Ibid., p. 439.

よ、公開演説家と成る勿れ。若し已むを得べくば、大道演説家と成る勿れ。驢馬の如き耳を備へ、内閣に席を有する俗物に訴ふる勿れ。言葉に依つて俗物に訴ふる勿れ。無禮なる俗物を憎み、彼等に去る事を命ぜよ。無言の仕事に依つて、若し仕事無くば無言の忍耐に依つて神々に訴へよ。文筆の才、汝斯くの如き才を有するか。其を信ずる勿れ、輕々しく信ずる勿れ。話せよ、書けよとは自然は嚴として汝に命ぜず、働けよと命じたのである。」

第六「國會」は國會を論じたもので、英國の國會はもと有効有益な集會であつたに、近時は全く駄辯會と墮落してしまつた。其の第一の理由は近世新聞の發達に伴ひ、議會の實際の仕事は新聞が勤める事と成つたが爲めである。第二は昔の議會には國王があつた爲め、其れは諮詢の府であつたに、大内亂以後は國王無く、議會が其れ自身主權者と成つた事である。自ら主權者と成つた近時の國會にして實績を挙げ得たるは英國の長期議會と佛國の國民集會と有るのみである。其等は眞面目で、秘密で、反對者が無かつた爲め實績を挙げ得たので、不眞面目で、公開で、統一の無い數百の頭顱をを列べた普通の

國會には望むべからざる事である。其れ故議會を有効ならしめんが爲めには、國王に代るべき有能の政府を作つて、議會を其の諮詢機關ならしめねばならぬ。

第七は題して「ハドスンの立像」と言ふ。ハドスは英國當時の鐵道王である。凡そ個人でも國民でも其の尊敬する人物に依つて其の思想の傾向が推知せられる。而して街頭や公園に立つ肖像は取りも直さず其の國民の尊敬する人物であると見なければならぬ。然らば英國の肖像に依つて示されたる英國國民の思想の傾向はどうであらう。其れは全く亂脈である。言語道斷である。今少しの所でハドスンすら肖像を立てられる筈であつた。

諸君は心の奥底で何人何物を讃嘆し、模倣しやうと勤めるか其の人は神の僕であるか、惡魔の僕であるか。明に此れが全問題である。人間には此れ以外重要な宗教は無いのである。

第八「ジエスイチズム」はイグナシウス・ロヨラの創立したジエスイット派の教義が誤魔化しを教へたもので、近世の歐洲は皆な其の害毒を

被^イひつて居ると論じたものである。然^イりと否^イなとを對立せしめずして、然^イりにして同時に否^イな (Yes and No) 否^イななれど然^イり (Yes though No) と云ふ事を許す所には凡てイエスイツト派の感化が有るのである。「¹⁾人の宗教は多くの事を自ら疑ひながら信せんと勤めて居る事には存せずして、少數の事を確知して信せんとする努力要をせざる事に存するのである。……人は其の宗

教に頼つて世界と永遠とを邀へて立つのであつて、其れを疑ふ事は全く許されぬのである。人は其の疑を確め又は除いて、其れを確然^イ然^イりか否かにせねばならぬ。然らざれば其の人の宗教は死するのである。金銭の慾を肯定して平生は其れに動かされて居ながら、日曜日には、之を凡ての害惡の源なりと説いて居る經典を讀む國民はイエスイツトの御弟子で無くて何であらう。

1) Ibid. p. 379.